

シニア松塚将棋クラブ NO283

令和6年3月21日(木) 1時30分～4時30分

例会は原則木曜日 次は3月28日

様

詰将棋問題

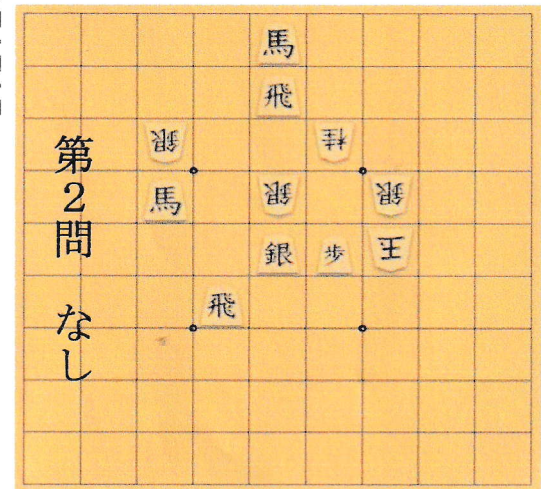
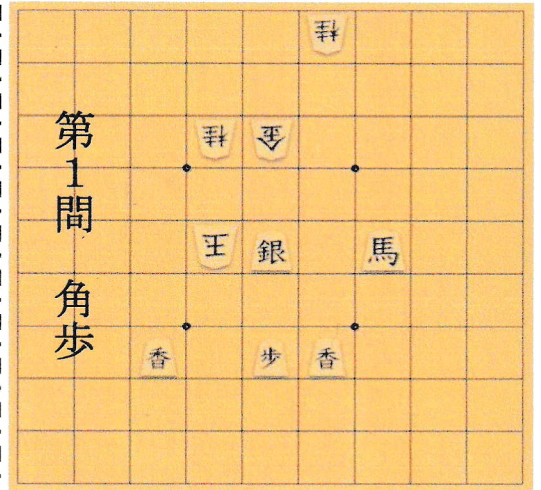
1問正解ごとに

1点とします

○ 4月から令和6年上半期(4月～9月)になりますので、会員の方は会費 1,500 円を会計の青田さんに納めてください。

尚、当クラブは例会に参加して会員と対局を楽しみ将棋を通して人格を高める、のが基本だと考えています。それが健康上の問題や家庭の事情など様々な理由で数か月、例会を欠席され、これからも例会に出席できる見込みがない方は一旦クラブを退会されて、例会に参加できる条件を整えば、改めて将棋クラブ入会の申し込みをしてください

○ NO282 詰将棋問題は7名の方から解答が寄せられ設楽二冠、花田さん、中さんが3問とも正解 佐々さん、上野さん、野末さん、青田さんが2問正解でした



NO282 詰将棋解答 (9手詰め)

- 第1問 1. ♀3 五角 2. ♀2 四歩 3. ♀2 五桂 4. ♀ 同桂
5. ♀4 三飛成 6. ♀2 二玉 7. ♀3 二角成 8. ♀1 一玉 9. ♀4 一竜
- 第2問 1. ♀3 三銀 2. ♀3 四玉 3. ♀5 二馬 4. ♀4 三銀
5. ♀2 六桂 6. ♀2 三玉 7. ♀3 二飛成 8. ♀ 同銀 9. ♀3 四馬
- 第3問 1. ♀7 六銀引 2. ♀5 四玉 3. ♀6 三角 4. ♀ 同金
5. ♀4 三竜 6. ♀6 四玉 7. ♀5 五角 8. ♀ 同玉 9. ♀4 四竜

詰将棋解答状況

玉置	二段	34	上野	二段	33	花田	三段	5	宮本		
青田	二段	35	設楽	二冠・三段	6	野末	二段	21	生野		
津田						佐々	初段	22	蒼天		
中	二段	37	秋山	二段	20	狩野	初段	3			

持将棋(引き分け)の定跡の誕生か。2月4日、富山県魚津市で指された第49期棋王戦五番勝負第1局が、将棋界やファンらに衝撃を与えた。後手番となった挑戦者・伊藤匠七段(21)の持将棋を狙った作戦に、藤井聡太棋王(21)が応じ、早い時間に引き分けになったからだ。

将棋は、得意の戦法に誘導しやすい先手がやや有利と言われ、2023年度の公式戦では先手勝率は56%。後手がその不利を乗り越えるため、引き分けを狙う戦略は今までもあった。特に藤井棋王は先手番で圧倒的に強く、23年度の勝率は96%。その先手番を引き分けに持ち込めれば、先手を交互に持ちながら複数局を戦うタイトル戦で、藤井棋王が独占する8冠を崩す可能性が高まる。

引き分けには2種類あり、多用されてきたのは、同じ局面が繰り返されて引き分けに



「持将棋狙いの定跡」に衝撃

伊藤七段「先手番有利に一石

なる「千日手」。一方で、条件が厳しく、成立までに時間がかかることが多い「持将棋」を最初から狙う棋士はいなかった。

藤井棋王悩ます

将棋は前に進む駒が多く、縦横9列ずつの将棋盤で、相



棋王戦五番勝負第1局に臨む藤井聡太棋王(手前右)と挑戦者の伊藤匠七段(同左)＝富山県魚津市で2月4日(日本将棋連盟提供)

手側に近い横3列(敵陣)に玉が到達(入玉)すると捕まりづらい。双方の玉が敵陣に入ると詰む見込みがなくなる。玉を除く持ち駒を点数化し、両者とも規定の点数以上があつて、双方が合意すれば引き分けとなる。

伊藤七段はAI(人工知能)を活用した事前研究が深い棋士として知られる。棋王戦第

1局では、先手番の藤井棋王が得意とし、AIが最も推奨する角換わり戦法を受けて立った。伊藤七段は研究に沿って時間を使わずに進め、藤井棋王の玉を前方に追いやりつつ、自身の玉の進軍ルートを作り上げ、午前から持将棋が予想される展開になった。持将棋にしては早めの午後5時半過ぎに129手で引き分けとなった。

めったに成立しない持将棋に誘導した伊藤七段の技量は見事で、それまで400局以上の公式戦を指してきた藤井棋王にとって初めての結果だった。終局後、伊藤七段は「(敵陣へ突進する)入玉を

目指すのは予定の方針だった」と用意した作戦の一つだったと明かし、藤井棋王は「伊藤七段の手のひらの上」という将棋になってしまった」と苦笑した。その2日後、藤井棋王に対策を尋ねたが、「相手のプランを阻止するのが難しく、どうすべきかは今後の課題」と悩まされた。

将棋など頭脳スポーツに詳しい古作登・大阪商業大助教は「相当研究していないと、

今回のような持将棋の手順は見つけられない」と伊藤七段の研究の深さに驚く。

双方が入玉して詰まない形になった場合、AI同士の間局やアマチュアの大会では、持ち駒の点数が先手は28点、後手は27点以上なら勝ちとし、引き分けがない「27点法」と呼ばれるルールを採用している。一方、プロの公式戦は双方が24点以上あれば合意の上で持将棋にする。

将棋対局のネット中継で形勢を数値で示すAIは、この引き分けのない27点法が取られているため、持将棋に近づくとAIの評価値は不正確になる。実際、棋王戦第1局の終盤では、AIは藤井棋王の勝率60〜70%と示していた。

研究活性化の契機

古作助教は、AIの数値に頼らずに、手順を精査しないと今回の作戦にはたどり着けないとして「後手番の有力な戦術を編み出した可能性がある」とたたえる。藤井棋王は日本将棋連盟が発行した書籍の中のインタビューで、将棋の「結論」について、「24点法」のルールで対局者が最善

を尽くし合うと持将棋引き分けになるのではないかと予想しており、古作助教も「その可能性は高い」と賛同する。

一方、「白ビール」の通称を持つ将棋AIを開発した芝世式・岡山県立大助教は「AI同士の間局では、年々先手の勝率が上がっている。持将棋の手順を外すこともできるので、(伊藤七段の)持将棋戦術がそのまま確立するとは思えない」と指摘し、見方が割れた。また、「依頼があれば24点法にAIを対応させる準備はしている」と言う。

3月3日、伊藤七段が再び後手番となった棋王戦第3局も第1局と同じ角換わりの戦型になったが、藤井棋王は第1局と違う展開を選び、持将棋手順を回避した。

それでも、トップ棋士の一人、中村太地八段は「持将棋を最初から狙う発想自体がなかった。先手有利と思われていた定跡の先に、持将棋の手順を見いだした伊藤七段がさすがで、先手はこの定跡を避けるよりない。今後、将棋界で持将棋研究は盛んになっていくだろう。それほどインパクトがあった」と話す。

持将棋戦略は、どのような広がりを見せるか。成り行きが注目される。【丸山進】